咽喉頭異常感症に対するバリダーゼ・ オラルの使用経験

伊東 真人・坂田 義治・阪上 雅史

宮口 衛・久保 武・酒井 俊一

Effects of Oral Varidase in Patients with Abnormal Sensation in the Throat

Mahito Ito, Yoshiharu Sakata, Masafumi Sakagami,
Mamoru Miyaguchi, Takeshi Kubo and Shun-ichi Sakai

(Kagawa Medical School)

The therapeutic effects of Varidase in 33 patients with abnormal sensation in the throat was evaluated. The patients were given 6 tablets of Varidase daily for more than 2 weeks. The abnormal sensation disappeared in 10 patients and partially subsided in 14 patients. Fifteen had tonsillitis, which was considered to be responsible for these sensations. These patients were more nervous and less responsive to the drug than the other patients.

Key words: drug effect, abnormal sensation in the throat, clinical effect

はじめに

咽喉頭異常感症は、通常の耳鼻科的診察によつては、訴えに見合うような器質的病変を局所に認めないが、咽喉頭に異常感を来す症候群と考えられている。

この成因として①局所の器質的・機能的疾患、②他の部位の器質的・機能的疾患、もしくは全身の疾患の部分症状、③心因性・精神病性疾患を考えるのが一般的である¹⁾。そして診断にあたって、頻度的には最も多いと思われる軽い局所の炎症が原因と思われる異常感症と咽喉頭異常感を訴えて来院するきわめて頻度の少な

い下咽頭がん、喉頭がんを鑑別するのが肝要であることはいうまでもなく、小池らは、この悪性腫瘍による異常感と、局所の炎症性病変や心因性による咽喉頭異常感症を鑑別するために、消炎酵素剤とマイナートランキライザーの併用投与の診断的治療の有用性を報告しており²⁾、またこれが広く行われているようである。

今回我々は、咽喉頭異常感症患者に対し、消炎酵素剤を投与し、局所炎症ことに扁桃炎が原因と考える患者と、その他器質的原因が考えにくい患者との間の消炎酵素剤に対する反応の違いを検討した。また性格および心理テストを行

い、咽喉頭異常感症患者の心理的、精神的特性についても検討し、興味ある結果を得たので報告する。

対象と投与方法

対象は、1985年2月より1985年7月までに香川医大耳鼻咽喉科を受診した咽喉頭異常感症患者31名であり、これらの患者は、当科の咽喉頭異常感症診断プロトコールにしたがい、一般的耳鼻咽喉科診察で副鼻腔炎、扁桃炎、甲状腺腫大などの局所因子をチェックし、また各種血液検査を行い、必要が認められたものには、甲状腺軟レ線撮影、頸椎6方向レントゲン撮影、下咽頭食道透視などレントゲン撮影および下咽頭食道ファイバーなどの精査を行った。またY-G性格テスト、CMI健康調査、MAS顕性不安テストを行った。

今回治療薬剤としてバリダーゼ・オラル6Tを単独もしくは併用（抗生剤とマイナートランキライザーを必要に応じて）で2週間以上投与し、その臨床効果を自覚症状で判定した。症状が全くとれたものを著効、症状が少しでも改善したものを有効、症状不変のものおよび悪化例を無効と3段階に判定した。

また今回特に、通常の視診では異常を認めないが、口蓋扁桃を圧迫したときに膿汁もしくは膿栓の排出する例を扁桃炎として、とくに扁桃炎がない症例との治療効果を別個に検討してみた。

臨床検査成績と治療成績

1. 対象年齢は男性10名、女性23名の計33名で、年齢構成は男性は各年齢に平等に分布していたが、女性は40才代にピークを示した(図1)。

2. 初診までの罹病期間は1ヶ月以内5名、1～3ヶ月が最も多く14名で、1年以上の長期が9名であった(表1)。

3. 耳鼻科的診察や、副鼻腔・頸椎6方向レントゲン検査や下咽頭・食道造影などの精査によって見出された疾患を表2に示す。

扁桃炎は口蓋扁桃の圧迫によって膿汁、膿栓と見られたものを扁桃炎としたが、実に15例(47%)の多数の症例を認めた。15例の扁桃炎の膿汁もしくは膿栓の細菌検査結果を表3に示す。半数は *γ-streptococcus*, *neisseria* の常在菌であったが、*β-streptococcus* が2名、*staphylococcus aureus* が2名と明らかに病原性と考えられる菌が以外に多く検出された。

図1 症例の年齢分布

これらの症例はとくに扁桃炎の既往を持たないものであった。

4. 性格心理検査

初診時にY-G性格テストCornel Medical Index およびMAS 顕在性不安検査を行い、32名に実施できた(表4)。Y-G性格テストのB型とE型を情緒不安定症とすると5名(16%)あり、CMIではⅢ、Ⅳ領域を神経症的と考えると12名(38%)が神経症的であり、MAS 顕在性不安検査ではⅠ、Ⅱを不安症とすると9名(28%)で、各々のテスト結果の、情緒不安

定、神経症的不安症の頻度は従来の咽喉頭異常感症での報告と変わりなく、また岩田らの報告のように各々のテストは密接に関連しており、Y-Gテストで不適応的な人は、CMIではⅢ、Ⅳ領域の神経症領域に属し、MASではⅠ、Ⅱの不安症を持っていると判定されている。今回我々は3つの性格心理テストのうち、2つ以上に異常と判定された患者は不安神経症として、扁桃炎と不安神経症との相関を検討してみた。

表5に示すように、扁桃炎と不安神経症は高い相関を示し、扁桃炎患者15名中8名と半数以

表1 初診までの期間

1ヶ月未満	5
1～3ヶ月	14
4～6ヶ月	5
7ヶ月～1年	0
1年以上	9
計	33例

表2 精査によって見出された疾患

対象症例	33例	
慢性扁桃炎	15	47%
慢性副鼻腔炎	3	9%
頸椎異常	3	9%
声帯ポリープ	2	6%
食道憩室	1	3%
逆流性食道炎	1	3%
不明	10	31%

表3 咽喉頭異常感症にしろ扁桃炎

慢性扁桃炎 15例の検出菌	
β-streptococcus	2
staphylococcus aureus	2
klebsiella pneumoniae	2
pseudomonas aeruginosa	1
haemophilus influenza	1
γ-streptococcus	7
neisseria	7

表4 33例の人格検査成績

表5 扁桃炎有病者と不安神経症

		扁桃炎		
		+	-	
不神経 安症	+	8	1	9
	-	7	17	24
		15	18	33

表 6 バリダーゼ・オーラルによる治療効果

	慢 性 扁 桃 炎	扁 桃 炎 以 外 の 咽 喉 頭 異 常 感 症	合 計
著 効	4	6	10
有 効	6	8	14
無 効	5	3	8
判 定 不 能	0	1	1
合 計	15	18	33

表 7 不安神経症の有無による治療効果

	不安神経症		合計
	+	-	
著 効	1 11%	9 39%	10 31%
有 効	5 56%	9 39%	14 44%
無 効	3 33%	5 22%	8 25%
合 計	9	23	32

上が不安神経症と判定され、反対に不安神経症と判定した 9 名のうち 8 名までもが扁桃炎と判定された。

バリダーゼ・オーラルによる治療効果を表 6 に示すが、胃潰瘍併発のため投薬を中止した 1 名を除く 32 名の 24 例に有効で 75% の有効率を示した。不安神経症がうかがわれる症例では、ない症例に比べ有効率が低い傾向があり、ことに著効例は不安神経症がうかがわれる例で少ない傾向がある (表 7)。

考 按

今回、咽喉頭異常感症の trigger としての扁桃炎を 1 つのポイントに検討したが、扁桃陰窩の圧膿所見を指標することについて、既に太田が報告しており、自覚症状の改善と圧膿所見が一致せず、慢性扁桃炎の指標としては不適當であるとしている³⁾。しかし、扁桃は炎症臓器であり、病気としての扁桃炎と通常の生理感染との境界は不明であり、自覚症状と圧膿所見がただちに一致しないからといって、臨床的な扁桃

炎の指標とならないとするのは早計であると考え、他に有効な指標がないこともあり、今回は扁桃の圧膿所見とした。

実際、この圧膿所見を指標とした扁桃炎と性格テスト、CMI、MAS 不安検査の 3 つより判定した不安神経症的な心理、精神的要因は深く相関していることが推察された。

つまり、扁桃炎と判定した患者の半数以上は不安神経症的と判定され、反対に、不安神経症的と判定した 9 名中 8 名までもが扁桃炎と診断されたという結果は、咽喉頭異常感症の 1 つの典型を示していると考えられる。つまり、臨床的には病気と診断されない軽い炎症 (扁桃炎) を有する人が、この炎症による何らかの異常感を心理的精神的に、おう悩することで咽喉頭異常感症という病気が形成される。

このため治療効果においても、不安神経症的と判定した患者群はそうでない群に比べ治療効果がおとり、また慢性扁桃炎と診断された患者群もそうでない群に比べ治療効果が悪い。ただ単なる炎症 (扁桃炎) ではない様相になっているのかもしれない。

今回は原則としてバリダーゼ・オーラルの単独投与としていたが、不安神経症的と判定した有効例のうち 1 例は、精神科を本人希望で受診し、精神科よりトランキライザーの投与を受け、著効例となったのをはじめ、不安神経症と判定した 5 名のうち他の 2 名もマイナートランキライザーの投与で著効例となった。

これらの経過を考えてみると、マイナートラ

ンキライザーを併用すると有効率がさらに上昇
すると考えられる。

ま と め

1. 咽喉頭異常感症症例33例にバリダーゼ・
オラルの2週間以上の投与を行い、胃潰瘍併
発の1例をのぞく32例に治療効果判定を行い、
著効10例、有効14例の有効率73%を得た。

2. 咽喉頭異常感症例33例のうち、扁桃圧膿
所見による扁桃炎は15例であった。このうち8
名が不安神経症と判定された。これらの症例の
治療効果は扁桃炎、不安神経症のない例に比べ
悪い傾向を認めた。

参考文献

- 1) 三好 彰：咽喉頭異常感症症例の臨床的観察。耳
鼻 31: 730~758, 1985.
- 2) 小池靖夫, 他：咽喉頭異常感症に対する診断的治
療。耳鼻臨床 72: 1499~1506, 1979.
- 3) 太田和博, 他：口蓋扁桃所見と咽喉頭異常感症。
第2回咽喉頭異常感(症)研究会講演集 2: 91~
92, 1985.

原稿到着：昭和60年12月17日

別刷請求先：伊東真人

〒761-07 香川県木田郡三木町大字池戸1750-1
香川医科大学耳鼻咽喉科学教室